

育児期における夫婦間のコミュニケーション態度の様相 — 1歳6か月児・3歳児を育てる夫婦に着目して—

森田 千穂 渡邊 典子
新潟青陵大学看護学部看護学科

Characteristics of marital communication attitudes during the child-rearing period, focusing on married couples raising children aged 18 months or 3 years

Chiho Morita Noriko Watanabe

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Niigata Seiryō University

要旨

本研究は、育児期における夫婦間のコミュニケーション態度の様相を明らかにすることを目的とした。1歳6か月ならびに3歳児健康診査を受診した児の両親を対象に無記名自記式質問紙調査による横断的調査を行った。936組の夫婦に配布し、回収された116組の夫婦ペアデータ（回収率12.4%）をもとに平山らの夫婦間コミュニケーション態度尺度の因子構造を再考し、「接近・共感」（ $\alpha=0.853$ ）、「威圧」（ $\alpha=0.767$ ）、「回避」（ $\alpha=0.671$ ）の3因子を抽出した。抽出した3因子の態度得点によりコミュニケーション態度について夫婦間の比較を行った。

結果、相手へのコミュニケーション態度の比較では、「接近・共感」が妻の方が有意に高く、「回避」では夫の方が有意に高かった。育児期の夫婦において、夫と妻ではコミュニケーション態度は異なる。また、妻は夫に対して接近共感的コミュニケーション態度をとり、夫は妻に対して回避的コミュニケーション態度をとる傾向にあることが示唆された。

キーワード

育児期、コミュニケーション態度、夫婦

Abstract

This study aimed to identify the characteristics of attitudes to marital communication during the child-rearing period. We conducted a cross-sectional study using an anonymous self-administered questionnaire with parents whose children had undergone the nationally required health examinations at 18 months or 3 years. Questionnaire forms were distributed to 936 married couples, of which 116 were collected (response rate: 12.4%). We reviewed the factor structure of the Scale on Marital Communication Attitudes by Hirayama based on the data obtained from the questionnaire, and extracted three factors: close/sympathetic ($\alpha = 0.853$), overbearing ($\alpha = 0.767$), and avoidant ($\alpha = 0.671$). We then compared attitudes to communication between husbands and wives based on the scores for the three factors.

The comparison showed that the wives had significantly higher scores for the 'close/sympathetic' factor than the husbands, and that the husbands had significantly higher scores for the 'avoidant' factor than the wives. Communication attitudes thus differed between the husbands and wives who were raising children: the wives tended to show close/sympathetic communication attitudes towards their husbands, whereas the husbands tended to show avoidant communication attitudes towards their wives.

Key words

child-rearing period, communication attitude, married couple

I はじめに

育児期は親への移行期ともいわれ、1組の男女が結婚して独立し、子どもの誕生によってその基礎的な構造を形づくっていく時期であり、その過程においてそれぞれ大きな発達的变化を経験する¹⁾。これまでの夫婦の二者関係から子どもを含めた三者関係へ移行することで、夫婦に夫・妻としての役割以外に父・母としての役割も加わり、夫婦の関係性に大きな変化が生じる^{2,4)}。この親へ発達していく移行の過程で、夫婦は育児の分担や生活の仕方に関する葛藤や不和を経験することになり、適切に対応できなければ夫婦関係は悪化すると報告されている^{2,3,5-6)}。

神谷は、親への移行過程における夫婦の役割相互調整は、日常的な子どもとの生活における実際の育児分担、夫婦間のコミュニケーションが繰り返される中で、夫婦関係満足や夫婦双方の性役割感や親役割感が大きく揺らぐダイナミックな過程を辿り、その家族のルールとパターンを形成・再構築していくことである⁷⁾と述べている。また、Belskyは、250組の夫婦を妊娠中から子が3歳になるまで縦断的に調査⁸⁾した研究で、親への移行期に夫婦関係を方向付ける6つの要素を見いだした。6つの要素とは「自己」「性イデオロギー」「情緒傾向」「期待」「コミュニケーション」「摩擦管理」である。家族システムの理論であるOlsonの円環モデルでは、①凝集性（きずな）、②柔軟性（かじとり）、③コミュニケーションの3つが重要概念とされ、コミュニケーションは凝集性と柔軟性の機能を促進するものであると位置づけられている⁹⁾。

以上のことから、家族システムやその下位システムである夫婦システムの機能を良好に維持し、親への移行にとまなう発達の課題を乗り越えるためには、夫婦のコミュニケーションは重要な要素であると言える。

平山によれば、米国では1920年代頃から夫

婦についての理論的・実証的研究が行われ、1960年代に入って不和に悩む夫婦とうまくいっている夫婦ではコミュニケーションスタイルが異なることが注目され、両群の比較研究が行われるようになった⁹⁾という。具体的には、夫と妻ではコミュニケーション能力・行動に違いがみられること¹⁰⁾が報告されている。例えば、葛藤場面におけるコミュニケーション行動では、妻が要請的（demanding）であるのに対し、夫は回避的（withdrawal）態度をとる傾向が強く、要請—回避パターンが観察されること¹¹⁾が明らかにされた。

夫婦研究が盛んな米国に比べて、わが国においては夫婦間のコミュニケーションに関する研究自体が多くはないのが現状であるが、その中では中年期を対象としたものが多くを占めている。中年期夫婦を対象とした研究¹²⁾では、夫婦間コミュニケーション態度として、「共感」「依存・接近」「無視・回避」「威圧」の4因子が同定された。また、妻では「共感」「依存・接近」というポジティブな態度を、夫では「無視・回避」「威圧」というネガティブな態度をより強くとり、コミュニケーション関係における非対称性を示した。平山は、この背景には伝統的な性役割観の影響と二者相互の社会経済的な力関係があると考察し、夫婦のコミュニケーションを文化・社会的文脈のなかで理解する必要性を強調している。

徐々に知見が蓄積されつつある中年期に比べて、育児期の夫婦間コミュニケーションに焦点を当てた研究は非常に少ない状況にある¹³⁾。日本では、「黙っていても分かり合える関係」を理想と捉える考え方が存在していたことが夫婦間コミュニケーション研究が立ち遅れた一因である¹⁴⁾と指摘されている。また、夫婦関係や夫婦コミュニケーションに関する先行研究はほとんど心理社会学者によるものであり、看護の現場における適用には至っていないことも指摘されている。

そこで、本研究では、育児期における夫婦間のコミュニケーション態度に着目し、その様相を明らかにすることを目的とした。夫婦のコミュニケーションという切り口から、親への移行期における発達の課題を乗り越える方策を探り、子育てに取り組む夫婦に対する看護実践の検討に向けた基礎資料を得ることをねらいとした。

II 研究方法

1. 研究デザイン

無記名自己記入式質問紙調査による横断研究である。

2. 調査対象

未就学児を育てる夫婦とし、A市内で実施された1歳6か月児健康診査ならびに3歳児健康診査（以下、健診とする）を受診した児の両親とした。研究対象数の確保、対象の偏りを出来る限り小さくするために、母子保健法による法定健診である1歳6か月児健診と3歳児健診の場を活用した。なお、児の健康障害や発達障害の有無、子の順位は問わないこととした。

3. 調査期間

2019年2月～3月

4. 調査の手続き

1歳6か月児ならびに3歳児健診時に、受診児の保護者に対して調査趣旨を説明し、調査協力依頼書、夫婦間のコミュニケーションに関する質問紙および返信用封筒一式（夫用、妻用1部ずつをセットにしたもの）を配布した。夫婦それぞれが自宅にて任意回答後、個別の返信用封筒に入れ、郵送法で回収した。

5. 調査内容

夫婦のコミュニケーションに関する項目と

して、夫婦間コミュニケーション態度尺度¹²⁾、基本属性を調査した。夫用・妻用ともに同一の質問項目で構成した。

1) 夫婦間コミュニケーション態度尺度

平山ら¹²⁾によって夫婦間コミュニケーションの様態を検討するために作成された尺度である。自分と相手のコミュニケーション態度について、夫と妻それぞれに「全くない」「あまりない」「ややある」「よくある」の4件法で回答を求めた。自分から相手への態度を問う設問と、相手から自分への態度を問う設問からなり、図1の通り4つの変数が観測される。図1の①は、夫から妻へのコミュニケーション態度を夫が自己評価するもの（以下、「妻への態度（夫）」とする）、②は、妻から夫へのコミュニケーション態度を妻が自己評価するもの（以下、「夫への態度（妻）」とする）であり、自分から相手への態度を自分自身が評価する。図1の①は、夫から妻へのコミュニケーション態度を受け手である妻が評価するもの（以下、「妻への態度（妻）」とする）、②は、妻から夫へのコミュニケーション態度を受け手である夫が評価するもの（以下、「夫への態度（夫）」とする）であり、相手から自分への態度を受け手が評価する。

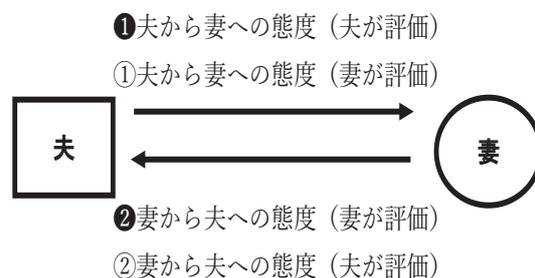


図1 測定されるコミュニケーション態度

2) 基本属性

年齢、最終学歴、家族構成、子どもの年齢および性別、就労状況、帰宅時間、収入、婚姻年数とした。夫婦間コミュニケーションとの関連が予測される属性要因として、先行研究の結果をもとに設定をした。

6. データ分析

中年期夫婦を対象とした調査により作成された夫婦間コミュニケーション態度尺度について、因子分析を行うことにより因子構造を再考した。因子分析によって得られた下位尺度について、下位尺度得点を算出し、夫婦間や属性による得点の差をt検定により分析した。分析にはSPSS Statistics25を用い、有意水準は5%とした。

7. 倫理的配慮

研究の趣旨や回答の自由、匿名性の確保、データの保管・破棄に関することについて書面および口頭で説明し、質問紙の返送をもって調査協力の同意とみなした。新潟青陵大学大学院看護学研究科倫理小委員会の承認を受けて実施した（承認番号：201806）。夫婦間のプライバシーを保護する目的で、夫用・妻用の別々の質問紙を作成し、個別の返信用封筒で返送してもらう方法を選択した。なお、夫婦であることが回収後に同定できるように、夫婦それぞれの質問紙に同じ番号を付したが、ペアリング目的のみに使用し、個人は特定されないことを説明した。

Ⅲ 結果

質問紙を936組の夫婦に配布し、夫121名（回収率12.9%）、妻144名（回収率15.4%）より回収した。そのうち、夫婦のデータが揃った116組（232名、回収率12.4%）のペアデータを使用した。有効回答数116組232（有効回答率100%）であった。

対象夫婦の夫の平均年齢は35.7±5.6歳、妻の平均年齢は34.3±4.9歳、婚姻年数は平均6.9±3.5年、子どもの数は平均1.84±0.79人、家族形態は核家族が77.9%であった。共働き49.6%、片働き（休業含む）50.4%であった。（表1）

表1 対象夫婦の背景

	夫 (n=116)		妻 (n=116)	
	Mean±SD	(range)	Mean±SD	(range)
	n	(%)	n	(%)
年齢	35.7±5.6	(18-49)	34.3±4.9	(20-46)
婚姻年数		6.9±3.5 (1-17)		
子どもの数		1.84±0.79 (1-4)		
1人		43 (37.1%)		
2人		51 (44.0%)		
3人		19 (16.4%)		
4人		3 (2.6%)		
家族形態				
核家族		90 (77.6%)		
拡大家族・複合家族		26 (22.4%)		
最終学歴				
中学校	4	(3.4%)	1	(0.9%)
高等学校	28	(24.1%)	23	(19.8%)
専門学校	18	(15.5%)	29	(25.0%)
高等専修学校	0	(0.0%)	1	(0.9%)
高等専門学校・短期大学	8	(6.9%)	28	(24.1%)
大学・大学院	57	(49.1%)	34	(29.3%)
その他	1	(0.9%)	0	(0.0%)
就労状況				
フルタイム勤務	109	(94.0%)	32	(27.6%)
パート・アルバイト勤務	3	(2.6%)	29	(25.0%)
週当たり就労日数	4.3±0.6	(4-5)	4.9±0.8	(3-7)
日当たり就労時間	8.0±2.8	(6-10)	5.2±1.5	(2-7)
無職	3	(2.6%)	36	(31.1%)
休業中(産休・育児・介護)	0	(0.0%)	19	(16.4%)
無回答	1	(0.9%)	0	(0.0%)
年収				
収入なし	3	(2.6%)	32	(27.6%)
130万未満	2	(1.7%)	23	(19.8%)
130~200万未満	1	(0.9%)	14	(12.1%)
200~300万未満	7	(6.0%)	17	(14.7%)
300~400万未満	32	(27.6%)	19	(16.4%)
400~600万未満	50	(43.1%)	10	(8.6%)
600~800万未満	16	(13.8%)	0	(0.0%)
800~1000万未満	2	(1.7%)	0	(0.0%)
1000万以上	3	(2.6%)	0	(0.0%)
無回答	0	(0.0%)	1	(0.9%)
帰宅時間 (就労している場合)				
6~10時台	4	(3.6%)	0	(0.0%)
11~15時台	0	(0.0%)	6	(9.8%)
16時台	0	(0.0%)	11	(18.0%)
17時台	13	(11.6%)	14	(23.0%)
18時台	23	(20.5%)	24	(39.3%)
19時台	32	(28.6%)	4	(6.6%)
20時台	20	(17.9%)	1	(1.6%)
21時台	11	(9.8%)	0	(0.0%)
22~0時台	7	(6.3%)	0	(0.0%)
無回答・その他	2	(1.8%)	1	(1.6%)

1. 夫婦間コミュニケーション態度尺度の因子構造

因子分析に先立ち、夫婦間コミュニケーション態度尺度21項目について項目分析を行った。「よくある」を4、「ややある」を3、「あまりない」を2、「全くない」を1として得点化した。項目毎の平均値、標準偏差、得点分布は表2に示す通りである。1項目で天井効果を、4項目でフロア効果をみとめたが、いずれも尺度構成上、必要な質問項目であると判断し、21項目すべてを以降の分析対象とした。なお、分析対象データにおいて因子分析を用いることの適切性を示すKaiser-Meyer-Olkinのサンプリング適切性基準は0.88と大きく (meritorious)、因子分析を適用してよいと判断を下した。

夫婦間コミュニケーション態度尺度の因子構造を明らかにするために、全21項目に対する夫婦232名 (116組) の評定値にもとづいて因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。夫・妻を込みで因子分析したのは、平山ら¹²⁾と同じく、夫と妻に共通するコミュニケーション態度の構造・次元を求め、その次元上での夫と妻の異同を検討することに意味があると考えたためである。また、調査では、同一内容について相手の自分へのコミュニケーション態度と自分の相手へのコミュニケーション態度を別々の項目で尋ねた。これら2種のコミュニケーション態度は、相手⇒自分と自分⇒相手と態度をとる方向は異なるものの、内容は同じであることから、方向にかかわらず共通の構造を明らかにするために、因子分析ではこれら2種のコミュニケーション態度を同一の変数として処理した。

因子分析の結果、固有値1以上の因子が4つ認められた。固有値の推移は、第1因子から順に6.239、2.445、1.699、1.081、…であり、スクリー基準からは3因子構造とも考えられた。そこで、3因子を中心に抽出する因子数を変えながら結果を比較検討し、より単純構

造に近く、また解釈もしやすいことから最終的に3因子を抽出することを適当と判断した。さらに、共通性の低い (0.25以下) 項目、いずれの因子にも高い負荷量を持たない項目を3項目削除し、再度3因子を指定した因子分析 (主因子法、プロマックス法) を行った。回転後の結果を表3に示す。

第1因子 (9項目) は「嬉しいことがある」と真っ先に相手 (あなた) に報告する」「相手 (あなた) に心を開いて内面的な突っ込んだ話しをする」など親和接近的な態度を示す項目と「相手 (あなた) に元気がないとき優しい言葉をかける」「相手 (あなた) の悩み事の相談に対して、親身になっていっしょに考える」など相手の立場にたって共感的に応じる態度を示す項目からなるため、「接近・共感」因子と命名した。第2因子 (5項目) は「日常生活に必要な要件を命令口調で言う」「相手 (あなた) より一段上に立って小ばかにした受け答えをする」など相手より優位に立って威圧的な態度をとることを示す項目からなるため、「威圧」因子と命名した。第3因子 (4項目) は「他のことをしながらうわの空で聞く」「相手 (あなた) の話しにいい加減な相づちをうつ」など回避的態度を示す項目からなるため「回避」因子と命名した。尺度の内的整合性を検討するために各下位尺度のCronbachの α 信頼性係数を算出したところ、第1因子「接近・共感」が $\alpha=0.853$ 、第2因子「威圧」が $\alpha=0.767$ 、第3因子「回避」が $\alpha=0.671$ であった。

表2 夫婦間コミュニケーション態度尺度項目の記述統計量

項目	n	Mean	SD	得点分布			
				1: 全くない	2: あまりない	3: ややある	4: よくある
1. あなたの立場に共感しながら、誠実に耳を傾ける	461	3.14	0.71	1.1	15.7	51.1	31.5
2. 会話がはずむように感情を豊かに表わす	461	3.06	0.81	2.4	22.8	41.4	33.4
3. 重要なことの決定は、あなたの意見に従う	461	3.05	0.75	2.6	18.4	50.8	28.2
4. 会話が途切れると相手の方から話題を提供する	461	2.82	0.88	6.1	30.4	38.6	24.9
5. あなたが相談すると、有益で参考になる意見をくれる	456	2.98	0.73	2.0	21.9	52.2	23.9
6. あなたの態度・行動で変えてほしいことがあっても黙っている	460	2.45	0.99	19.3	34.1	29.1	17.4
7. 話の内容が気に入らないとすぐ怒る	461	2.02	0.96	36.7	33.2	21.9	8.2
8. 他のことをしながらうわの空で聞く	460	2.58	0.83	9.8	34.8	42.8	12.6
9. あなたの話しにいい加減な相づちをうつ	461	2.28	0.84	17.1	45.8	29.1	8.0
10. あなたがおしゃれをしたとき、気づいてほめる	459	2.57	0.89	11.5	35.5	37.3	15.7
11. 日常生活に必要な要件を命令口調で言う	460	1.72	0.87	51.5	29.3	15.0	4.1
12. 相手自身の悩み・迷い事があると、あなたに相談する	460	3.09	0.84	3.3	21.3	38.5	37.0
13. 1日のあなたの過ごし方などを相手の方から尋ねる	461	2.65	0.91	10.0	35.1	34.5	20.4
14. あなたが話しているのに、「要するに」といって結論をせかす	461	1.71	0.87	52.1	28.4	15.6	3.9
15. 都合の悪い話しになると、黙り込む	461	2.18	1.02	30.6	34.5	20.8	14.1
16. 嬉しいことがあると、真っ先にあなたに報告する	461	3.40	0.75	2.2	9.8	33.8	54.2
17. あなたより一段上に立って小ばかにした受け答えをする	460	1.71	0.86	51.7	29.6	14.6	4.1
18. あなたに元気がないとき優しい言葉をかける	461	2.97	0.79	4.1	20.4	49.5	26.0
19. あなたが心情を訴えても、まともに取り合わない	461	1.65	0.72	47.5	41.4	9.3	1.7
20. あなたの悩み事の相談に対して、親身になっていっしょに考える	461	3.23	0.71	1.7	11.1	49.9	37.3
21. あなたに心を開いて内面的な突っ込んだ話しをする	461	3.05	0.81	2.4	23.2	41.9	32.5

表3 夫婦間コミュニケーション態度尺度の因子構造

(n=458)

因子名	項目	平山 (2001) の 因子構造	因子			α係数
			I	II	III	
接近・共感	16. 嬉しいことがあると、真っ先に相手 (あなた) に報告する	依存・接近	.757	.067	.104	.853
	21. 相手 (あなた) に心を開いて内面的な突っ込んだ話しをする	依存・接近	.703	.134	-.014	
	12. あなた (相手) 自身の悩み・迷い事があると、相手 (あなた) に相談する	依存・接近	.692	.240	-.097	
	4. 会話が途切れるとあなた (相手) の方から話題を提供する	依存・接近	.647	.211	-.044	
	2. 会話がはずむように感情を豊かに表わす	依存・接近	.610	-.041	.006	
	18. 相手 (あなた) に元気がないとき優しい言葉をかける	共感	.578	-.263	.051	
	20. 相手 (あなた) の悩み事の相談に対して、親身になっていっしょに考える	共感	.556	-.258	.002	
	10. 相手 (あなた) がおしゃれをしたとき、気づいてほめる	共感	.556	-.121	.043	
	1. 相手 (あなた) の立場に共感しながら、誠実に耳を傾ける	共感	.420	-.338	-.078	
	威圧	11. 日常生活に必要な要件を命令口調で言う	威圧	-.005	.770	
17. 相手 (あなた) より一段上に立って小ばかにした受け答えをする		威圧	-.045	.684	.107	
7. 話の内容が気に入らないとすぐ怒る		威圧	.196	.665	-.035	
14. 相手 (あなた) が話しているのに、「要するに」といって結論をせかす		威圧	.084	.464	.199	
19. 相手 (あなた) が心情を訴えても、まともに取り合わない		威圧	-.350	.432	.140	
回避	8. 他のことをしながらうわの空で聞く	無視・回避	.099	.157	.744	.671
	9. 相手 (あなた) の話しにいい加減な相づちをうつ	無視・回避	.071	.206	.709	
	15. 都合の悪い話しになると、黙り込む	無視・回避	-.098	-.056	.512	
	6. 相手 (あなた) の態度・行動で変えてほしいことがあっても黙っている	無視・回避	-.130	-.453	.506	
		因子間相関	I	II	III	
		I	—	-.417	-.496	
		II		—	.303	
		III			—	

注. 因子分析 (主因子法、プロマックス回転)

注. 夫・妻それぞれの「自分から相手への態度」と「相手から自分への態度」という2種の回答を全て含めて分析した。なお、無回答は欠損値として分析対象から除外した。

注. () 内は、相手の自分に対するコミュニケーション態度を尋ねる項目内容である。

注. 平山 (2001) の尺度から除外された項目は以下の3項目であった。

- 3. 重要なことの決定は、あなたの意見に従う (依存・接近)
- 5. あなたが相談すると、有益で参考になる意見をくれる (共感)
- 13. 1日のあなたの過ごし方などを相手の方から尋ねる (依存・接近)

2. コミュニケーション態度の夫婦間比較

コミュニケーション態度について夫婦間の比較を行うために、夫と妻の夫婦間コミュニケーション態度尺度における各態度得点を求め、対応のないt検定により夫婦間の差を検討した。なお、態度得点は各下位尺度に含まれる項目の平均値とした。

1) 相手へのコミュニケーション態度 (表4)

相手へのコミュニケーション態度を比較検討するために、夫の妻への態度得点 (図1の①) と妻の夫への態度得点 (図1の②) について比較した。結果、「接近・共感」においては、妻の夫への態度得点 (②) が夫の妻への態度得点 (①) より有意に高く、一方、「回避」においては夫の妻への態度得点 (①) が妻の夫への態度得点 (②) より有意に高かった。「威圧」については夫婦の得点差は有意ではなかった。

2) 相手からのコミュニケーション態度 (表5)

相手からのコミュニケーション態度を比較するために、夫が評価する妻の自分への態度得点 (図1の②) と妻が評価する夫の自分への態度得点 (図1の①) について比較した。結果、「威圧」においては、妻の夫への態度得点 (②) が夫の妻への態度得点 (①) より

有意に高く、一方、「回避」においては夫の妻への態度得点 (①) が妻の夫への態度得点 (②) より有意に高かった。「接近・共感」については夫婦の得点差は有意ではなかった。

3. コミュニケーション態度における送り手と受け手の認知の比較 (表6)

コミュニケーション態度について、送り手側と受け手側の認知 (図1の①と①、または②と②) を比較検討するために、下位尺度ごとに「妻へのコミュニケーション態度」および「夫へのコミュニケーション態度」のそれぞれについて、送り手の態度得点と受け手の態度得点を求め、対応のないt検定により夫婦間の差を検討した。

結果は、「接近・共感」と「威圧」の2態度で夫と妻の間に得点差がみられた。「接近・共感」では、夫への態度において、送り手である妻の得点が受け手である夫の得点より高かった。「威圧」では、妻への態度において、送り手である夫の得点が受け手である妻の得点より高かった。「回避」については、夫と妻の間に有意差はみられなかった。

表4 送り手からみた相手へのコミュニケーション態度得点の比較

	①夫の妻への態度 (夫が評価)			②妻の夫への態度 (妻が評価)			p値
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	
接近・共感	114	2.98	0.50	114	3.21	0.51	<0.001
威圧	113	1.81	0.57	115	1.82	0.63	0.95
回避	114	2.63	0.66	115	2.14	0.56	<0.001

注. 対応のないt検定

表5 受け手からみた相手へのコミュニケーション態度得点の比較

	①夫の妻への態度 (妻が評価)			②妻の夫への態度 (夫が評価)			p値
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	
接近・共感	115	2.93	0.57	115	3.04	0.55	0.13
威圧	115	1.56	0.58	116	1.85	0.65	<0.001
回避	114	2.63	0.66	116	2.10	0.53	<0.001

注. 対応のないt検定

表6 送り手と受け手のコミュニケーション態度得点の比較

		相手への態度 相手からの態度	評価者	n	Mean	SD	p値
接近・共感	①	夫の妻への態度	夫が評価	114	2.98	0.50	0.46
	②	妻の夫への態度	妻が評価	115	2.93	0.57	
	①	夫の妻への態度	妻が評価	114	3.21	0.51	0.02
	②	妻の夫への態度	夫が評価	115	3.04	0.55	
威圧	①	夫の妻への態度	夫が評価	113	1.81	0.57	<0.001
	②	妻の夫への態度	妻が評価	115	1.56	0.58	
	①	夫の妻への態度	妻が評価	115	1.82	0.63	0.70
	②	妻の夫への態度	夫が評価	116	1.85	0.65	
回避	①	夫の妻への態度	夫が評価	114	2.63	0.66	0.96
	②	妻の夫への態度	妻が評価	114	2.63	0.66	
	①	夫の妻への態度	妻が評価	115	2.14	0.56	0.58
	②	妻の夫への態度	夫が評価	116	2.10	0.53	

注. 対応のないt検定

IV 考察

1. 育児期における夫婦間コミュニケーション態度の因子構造の検討

本研究では、育児期の夫婦を対象としていることから、あらためて夫婦間コミュニケーション態度尺度の因子構造の確認を行った。因子分析の結果、全体的な傾向として平山らの先行研究^{12,15)}に従う結果が得られたが、一部異なる因子構造・尺度構成となった。平山らは、中年期の夫婦を対象に夫婦間コミュニケーション態度の構造を「威圧」「共感」「依存・接近」「無視・回避」の4因子に分類¹²⁾した。本研究では、既存尺度の「依存・接近」因子に含まれる項目のうち、「重要なことの決定は相手の意見に従う」「1日の相手の過ごし方などをあなたの方から尋ねる」といった依存的態度をしめす項目は因子構造に含まれず、親和接近的態度項目が残った。また、その親和接近的項目と共感的項目が一つにまとまり、「接近・共感」「威圧」「回避」の3因子構造が確認された。平山らの同尺度¹²⁾を使用して、20代～80代の幅広い年齢層を対象に夫婦間コミュニケーション態度を検討した粕井の調査¹⁶⁾では、本研究と同様の項目構成による3因子構造を支持する結果となっている。このことから、対象者は、親和接近的態度と共感的態度を区別することなく、共通したポ

ジティブなコミュニケーション態度と捉えていることが推察される。

2. コミュニケーション態度からみた育児期における夫婦間コミュニケーションの様相

送り手側からみた相手へのコミュニケーション態度について、妻は夫に比べて相手に対して「接近・共感」というポジティブなコミュニケーション態度をとっていると認知していた。一方で、夫は妻に比べて相手に「回避」的コミュニケーション態度をとっていると認知していた。平山らの先行研究¹²⁾同様に、夫と妻ではコミュニケーション態度は異なっていることがわかる。また、育児期の夫婦間のコミュニケーション態度は、「接近・共感的な態度でアプローチする妻と回避的な態度で身をかわす夫」という様相がうかがえる。

受け手側からみた相手からのコミュニケーション態度については、夫は妻に比べて相手から「威圧」的コミュニケーション態度で対されていると認知していた。妻は夫に比べて相手から「回避」的コミュニケーション態度で対されていると認知していた。相手へのコミュニケーション態度の結果をあわせて考察すると、夫が妻に対して回避的態度で接していることは、受け手である妻はもちろん、送り手である夫も自覚しているといえる。

送り手と受け手の認知については、「接近・

共感」と「威圧」の2態度で送り手と受け手の認知に差がみられた。「接近・共感」では、夫への態度において、送り手である妻の得点が受け手である夫の得点より高かった。つまり、妻は夫に対して接近共感的なコミュニケーション態度をとっていても、夫は妻が思っているほど接近共感的な態度で対されていると認知していないと考えられる。「威圧」では、妻への態度において、送り手である夫の得点が受け手である妻の得点より高かった。つまり、夫は妻に対して威圧的なコミュニケーションをとっていると思っても、妻は夫が思っているほど威圧的な態度で対されていると認知していないと考えられる。

以上のことから、育児期における夫婦間のコミュニケーション態度の様相は、中年期夫婦にみられた「威圧的な態度の夫と依存接近的な妻」という特徴とは異なるといえる。当時の中年期夫婦の様相が、夫を上位とみなす「夫唱婦随」的な伝統的性役割観や社会経済的勢力関係によるものだとするれば、現代の育児期夫婦のコミュニケーション態度の様相は、平等性・対等性を重んじる平等主義的な意識への変化のあらわれとも捉えることが出来る。

妻のコミュニケーション態度の様相として、夫に対して接近共感的態度で接していることがあげられる。育児期においては、女性は出産退職あるいは育児休業によってそれまでの社会生活から切り離され、コミュニケーションする相手が配偶者に限定されがちである¹⁷⁾という。実際に、母親の子育てに関する相談相手は夫であることが最も多く、子どものことを中心とした会話がなされている¹⁸⁾。育児期の多忙さと子育ての悩みを抱えながら多重役割を担っている妻は、最も身近なパートナーである夫とのコミュニケーションへの渴望が強いのではないかと推察される。

夫のコミュニケーション態度の様相としては、妻に対する回避的態度があげられる。Gottmanは、夫側の相互作用からの撤退行動

(批判や意見の対立を回避するような態度)の多さは、将来、夫婦関係が悪化していることを予見していた¹⁹⁾という。この結果を受けて柏木は、「働きかけようとする妻と、回避しようとする夫というギャップが持続すれば、効果的なコミュニケーションや問題解決への態度がますます失われ、相手への失望感が増えて、夫婦関係の悪化は避けられなくなる。問題から目をそらさずに意見交換できる2人のコミュニケーションパターンは、将来的には問題解決を有効にはかる方向にはたらく」¹⁹⁾と主張する。ただ、一方で、夫の回避的態度の背景には、育児に奮闘する妻の姿を前に、意見の対立で余計な負担をかけまいとする夫の思いがある可能性も否定はできない。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、本調査では全体のデータ回収率は非常に低かったものの、夫・妻ともに回答が得られた割合が高かった。夫婦のデータが揃ったこと自体、夫婦関係や夫婦間コミュニケーションが比較的良好である夫婦であることが推測され、調査結果にバイアスが生じている可能性がある。回収率が低い理由として、未就学児を育てる育児期は毎日が多忙であり、相対的に回答負担が大きくなりやすいことが考えられる。また、夫婦のペアデータを用いるという手法を選択したこと、また、調査協力の自由意志を尊重し出来る限り強制力を排除した調査方法を選択したことも、先行研究に比して回収率が低下した一因であると考えられる。

本研究では、育児期における夫婦間のコミュニケーション態度の様相を捉えた。また、夫婦間でのコミュニケーションの送り手と受け手の双方の視点から検討できたことは有用であった。しかし、子の誕生を機に夫婦の二者関係から子を含めた三者関係に変化し、その後も時間経過とともに変化し得る夫婦のコミュニケーション態度の様相を検討するには

至らなかった。今後は、育児期の夫婦間コミュニケーションや夫婦の関係性がどのように培われ、今後どのような変化を遂げていくのか、縦断的な視点も含めた検討をすることが必要である。また、育児期における夫婦のコミュニケーション態度を特徴づける背景には何が存在するのか研究を進めていくことが課題である。

V 結論

1. 育児期の夫婦間コミュニケーション態度は、「接近・共感」「威圧」「回避」の3因子からなる。
2. 育児期の夫婦において、夫と妻ではコミュニケーション態度は異なる。また、妻は夫に対して接近共感的コミュニケーション態度をとり、夫は妻に対して回避的コミュニケーション態度をとる傾向にあることが示唆された。

謝辞

本研究にご理解とご協力をいただきました対象者の皆様、A市母子保健ならびに健康福祉関連部署の皆様にご心より感謝と御礼を申し上げます。

なお、本研究は新潟青陵大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆修正したものであり、2018年度日本助産学会若手研究の助成を受けて実施した。

文献

- 1) 神崎光子. 家族形成期における家族のつながりを支援する. 家族看護. 2008; 6(1): 8-12.
- 2) Jay Belsky, John Kelly, 安次嶺佳子. 子供をもつと夫婦に何が起こるか [The

transition to parenthood]. 東京: 草思社; 1995.

- 3) 中澤智恵, 倉持清美, 田村毅, 岸田泰子, 木村恭子, 及川裕子, 他. 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響(4): 第一子出生後の夫婦関係の変化と子育て. 東京学芸大学紀要 第6部門 技術・家政・環境教育. 2003; 55: 111-122.
- 4) 倉持清美, 田村毅, 久保恭子, 及川裕子. 子どもの発達的变化にともなう夫婦の意識の変容. 日本家政学会誌. 2007; 58(7): 389-396.
- 5) 小野寺敦子. 親になることにともなう夫婦関係の変化. 発達心理学研究. 2005; 16(1): 15-25.
- 6) 田中恵子. 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性. 人間文化研究科年報. 2010; 25: 215-224.
- 7) 神谷哲司. 夫と妻の生涯発達心理学: 関係性の危機と成熟. 宇都宮博. 146-157. 東京: 福村出版; 2016.
- 8) 立木茂雄. 家族システムの理論的・実証的研究: オルソンの円環モデル妥当性の検討. 東京: 川島書店; 1999.
- 9) 平山順子. 家族内コミュニケーション: ころを運ぶことばの力. 日本家族心理学会. 53-66. 東京: 金子書房; 2004.
- 10) Gottman, J., Markman, H., Notarius, C. The topography of marital conflict: A sequential analysis of verbal and nonverbal behavior. Journal of Marriage and the Family. 1977; 461-477.
- 11) Christensen, A., Heavey, C. Gender and social structure in the demand/withdraw pattern of marital conflict. Journal of Personality and Social Psychology. 1990; 59(1): 73.
- 12) 平山順子, 柏木恵子. 中年期夫婦のコミュニケーション態度: 夫と妻は異なるのか?. 発達心理学研究. 2001; 12(3): 216-227.
- 13) 田中恵子. 育児期の夫婦関係研究に関する

- る文献レビュー. 大和大学研究紀要 保健医療学部編. 2017; 3: 3-9.
- 14) 柏木恵子, 大野祥子, 平山順子. 家族心理学への招待: 今、日本の家族は?家族の未来は?(第2版). 京都:ミネルヴァ書房; 2009.
- 15) 平山順子, 柏木恵子. 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン: 夫婦の経済生活及び結婚観との関連. 発達心理学研究. 2004; 15(1): 89-100.
- 16) 粕井みづほ. 夫婦間コミュニケーションの特徴と結婚年数による違い. 日本家政学会誌. 2014; 65(2): 50-56.
- 17) 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子. 夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響-自己開示を中心に. 文京学院大学人間学部研究紀要. 2007; 9(1): 1-15.
- 18) 友田貴子, 久保貴子, 加藤康子, 坂本美穂子, 清水茜, 清水茉衣. 母親の子育てに関する相談相手とそこから得られる安心感について. 埼玉工業大学人間社会学部紀要. 2013; (12). 41-46.